
カゲツキ ~影月~

雨蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カゲツキ ～影月～

【Nコード】

N1952Z

【作者名】

雨蛙

【あらすじ】

派遣会社影月。

その会社は、総勢二名。雇用主の少女、影崎聖香。派遣社員である少年、月城雪人。

雇用主である彼女が少年を派遣するのは、唯一つの条件を満たした職場のみ。

それは、殺し合いの場。交渉を捨て、本能のまま人を殺すことを許されら場所。

何故なら、少年はそれしかできないから。少女はそれしか知らない

から。
そんな二人の歪んだ物語。

プロローグ（前書き）

初投稿です。色々と不足の部分はあると思いますが、なにとぞ、よろしく願います。

プロローグ

「さあ、レッツ契約よ」

黒髪の少女は、微笑と共に、一枚の紙を差し出してきた。

どこかのビルのロビーだった。その脇にあるカフェテリアで、一人の少年は、ある契約を迫られていた。

勿論、詐欺の類ではない。

契約を迫られている白髪の少年は困惑顔を少女に向けたが、彼女の微笑は変わらない。

仕方なく彼女から目を逸らして、渡された紙。つまり、契約書に目を下ろした。

契約の内容を簡単に言つと、とある派遣会社の派遣社員になる。そんなものだった。

だが、実際の内容は違う。これは表向きの物だ。

少年は、それを知っている。だからこそその困惑だ。

「なあ、どうして俺なんだ？フリーの奴なんてそこ等辺にわんさか居るだろうに……。ここは、そういうところだしな」

「だけど、貴方の腕は、そこらのフリー（ザコ）どもとは、違う。そうよね？」

「 どうして、そう思う？」

「だって、貴方からの血の匂い、その辺の人間と比べて濃すぎるわよ？紛れているように見えて紛れられていない。異端の中の異端。草食動物の群れに混ざった肉食動物。」

貴方、常人としての人生を絶対送れないタイプね」

「そんなのは、最初から分かってる」

ぼそりと、少年は呟いた。

「群れに混ざれるはずが無い。俺の体は呪われている。血の一滴。」

爪の先まで殺意が狂気が押し込められている。

……そんな人間が群れに居られるはずが無いだろ」

「私だって、そうよ。私だってそれくらいしか知らない。他のことを問われても、私には答えられない」

「それでも……俺は……」

少年は、契約書を見つめて、ぼそりぼそりと言葉を紡いだ。それから、椅子から立ち上がり、

「この話は、無かった事にしてくれ」

少年が立ち去ろうとすると、がしりと少女が少年の腕を掴んだ。

「行かせない」

「なんでだよ」

振りほどこうとする少年の腕を少女は離さない。

「だって、貴方、ここで逃したら絶対に巡り合えない逸材の臭いがあるもの」

「なんだよ、それ」

「そのままよ。ほら、さっさと契約しなさい」

命令口調の彼女に少年は、思わず苦笑を浮かべた。

こいつなら、大丈夫、かな。

少年の脳裏にそんな言葉が浮んだ。

「大丈夫よ。貴方を見捨てたりなんてしない」

「……どうして、分かったよ」

「簡単よ」

少女は、自信満々に言葉を紡ぐ。

「女だから。それだけよ」

少年は、苦笑を深めて、

「ペンはどこだよ？」

少女にそう訊ねた。

少年は、少女からボールペンを受け取り、記入欄に書き込んだ。それを少女に渡すと、彼女は、満足げな笑みを浮かべ、

「これで、一人目の社員ゲットよ」

「一人目？」

「ええ、設立したばかりだから」

「それはまた、底辺な事で」

「そうね、底辺ね」

少年の僅かな呆れを含んだ言葉に、少女は、不敵に笑ってみせる。

「それって、上を蹴落として、登りつめる快感が何度も味わえるってことよね？」

その少女の笑みに少年は、息を呑み、目を僅かに見開いた。そして、彼女と同じ様な笑みを浮かべて、

「確かに、そうだな」

同意。そして、尋ねる。

「ちなみに、会社の名前は？」

彼女は、艶やかな唇を動かして、その名を紡いだ。

「影月、なんてどうかしら？私の影と貴方の月」

「安易だな」

「でも、良い名でしょう？」

彼女の問い掛けに、少年は、小さく苦い笑みを零し、

「言えてる」

それは、数年前の冬のとあるビルでの小さな出来事。

そして、二人の始まりの出来事。

空には、大きな満月が浮んでいた。

「今日の月は、綺麗だな……。ほんと、この月は好きだよ、俺」
 白い息を吐きながら空を見上げているのは、一人の少年。彼は、今、通りを見下ろせる数あるビルの一つの屋上に居た。

白髪に猫目。猫のような瞳の黒目は、黒ではなく、金色だ。さらに、右目には、医療用の白い眼帯を付けている。中背中肉で、身長は、百七十前後と言った所か。服装は、白のパーカーに黒のカーゴパンツ。

「私も好きよ。この月は」

少年の後から、一人の少女が現れた。影に同化してしまいそうなほど、夜の闇に溶けてしまいそうなほどに黒い少女だった。

年齢は、十六、七歳辺りだろうか？服装は、黒一色。黒のドレスに、黒のハイヒール。
 髪は、何の光も通さないとばかりの黒だ。漆黑よりも暗い。闇色。そう評するのが相応しい色合いだった。瞳も黒。大きく、少し釣り目の瞳は、挑発的な光を宿している。唇は、軽く歪められていて、人を喰った様な愛嬌と、同時に、冷たい氷のような冷酷さも合わせ持っていた。

そんな黒の少女の中でも、只、肌だけは、純白。この世の何者よりも、何物よりも白いであろう肌。勿論、染みの一つも、凹凸も無い。滑らかで白い肌。世界中の女性が渴望するであろう美貌だった。そ

れの前では、男女、性別関係なく彼女の容姿には、目を見開き、唾を呑み込みしか出来ないであろう。

だが、少年は、思春期真っ只中であろうに、特に興味を示した様子は無い。彼女の方に片目分の視線をやるだけで留まる。

唯、思う事は、

(寒くないのだろうか?)

まあ、いいか。と思考から切り捨て、

「今日のターゲットは？」

と、訊ねた。

「あれよ」

彼女の指差す方向に少年は、片目を向ける。

そこには、少し幅の広めの路地。最近建築されたビルや、繁華街の華やかさの陰に隠れているせいも、それとも、元々人が少ない(意図的に閉鎖された)せいも。裏路地にまばらに並べられた街灯が照らしているのは、ダークスーツを身に纏った男達のみ。

それぞれ手には、銃器らしき影がある。が、それは、常人の目で見ただけだ。少年の片目は、正確に男達の姿と、銃器を捉えていた。

彼の目を通すと、男達の人数は四人。銃器は、自動式拳銃に、ショットガン、軽機関銃。それぞれが、凶悪な武器だが、少年には、只の豆鉄砲にしか見えない。

「あれを殺せばいいのな？いつも通りに」

「ええ、雪人」

「たまには、やりがいのある仕事がしたいねえ」

ウンザリした様にそうぼやく少年 雪人の右手には、何時の間にか大振りの刃に僅かな凹凸を持つ、ダガーナイフ。それを、クルクルと手の中で回して玩んでいる。

「文句を言わない。そう言う契約でしょう？」

「ま、雇用主の意思は尊重するよ」

雪人は肩を竦めて、ビルフェンスを乗り越え、飛び降りた。

そのビルは五階建て、普通の人間ならば、何らかの怪我 もしくは、死に至るであろう高さだ。だが彼は、何の躊躇も無く、飛び降りた。数秒もかからない内に、雪人の体は、コンクリートの上に着地した。衝撃を殺すために、着地と同時に膝を曲げ、前へと転がった。まるで猫のように四つん這いになり、衝撃を殺す。と、すぐに加速。足は、コンクリートを強く蹴りつける。そこに音は生じない。確実に、静かに彼は、得物の近くに辿り着く。

着地したのは、男達の数メートル手前。雪人の目は、暗闇の中から、既に、男達を捉えている。男達も少し遅れて、銃口を雪人に向けた。発砲。

盛大な発砲音と共に、それぞれの銃口から弾丸が吐き出される。だが、銃口の先に、雪人は居ない。

雪人は、男達目掛け、既に走り出している。左手には、投擲用の細身のナイフ。鋭く左手は、閃いた。投擲用ナイフは、男達の内一人、ショットガンを持った男の喉を穿つ。

一人始末完了。

雪人は、内心でそう呟き、右手のダガーナイフを無造作に、目の前の男の首目掛けて振るった。

雪人の速度に反応すら出来ず、また一人、首から血を吹き上げて、絶命。

死体がまた一つ、通りに転がった。ガシヤンと、自動式拳銃がコンクリートの上に転がる。

それを一瞥。そして、残りの二人に視線を飛ばした。

残りの二人は、連携してこちらをしとめる事にしたようだ。アイコンタクトを取り合い、一人が軽機関銃を手に大きく距離をとる、バツクステップ。もう一人は、軍用らしき大振りのナイフを取り出し、逆手で構え、顔の前に引寄せた。左手は背中の方に隠すように構えている。恐らく、そちらには、拳銃が握られているのだろう。

が、

「俺に接近戦で勝とうってのには、数億年早えよ」

小さく呟き、ナイフの男との僅かな距離を一瞬に満たない速度で駆けた。

男は、驚愕に表情を揺らがせたが、腰の辺りに隠していた左手の拳銃を雪人に適当な照準をつけて、発砲。

雪人は、弾丸を放つ前の拳銃の銃口に、左手で腰のホルダーから引き抜いた、細身の投げナイフを投擲。

次の瞬間、拳銃が轟音を上げて、内から弾けた。肉片と、金属片が周囲に飛び交った。

大きく口を開けて、呆然と無残な姿を晒す左手を見つめる男を雪人は、後の男から隠れる為の盾にする。発砲を躊躇する気配が伝わる。それを感じるとすぐに、後の男目掛け、ナイフを持った男を蹴り飛ばす。

ナイフ男は、吹き飛び、後ろの男にぶつかる。激突の拍子に、後の男の短機関銃が暴発した。僅かな間に引かれた引き金を合図にナイフ男は、数回跳ね、膝から崩れ落ちた。体のいたるところに穴が空き、そこから血液を零す。

「ラスト！」

雪人は、気合の呼気と共に声を上げた。血に染まった男目掛け、腰の専用ホルダーから取り出した投擲用ナイフを左手の手首を動かす動作と共に投擲した。

胸に命中。雪人は、投擲用ナイフが突き刺さると共に接近。速度を殺さず、生かしたまま、肘を曲げて、腰ためにダガーナイフを打ち出した。腕が伸びきった体勢で、ダガーナイフは男の首に突き刺さった。ナイフを持ったまま、上方斜め、黒服の耳周辺を叩く強烈無比のハイキック。

それを受け、男は、数メートル吹き飛んで、ピクリとも動かなくなった。ナイフを喉に刺したまま蹴り飛ばしたので、完全に喉は機能しなくなっているだろう。

殲滅完了。

雪人は、内心でそう呟いてから、ダガーナイフの血糊をそばに転がっている男のスーツに拭き付けた。それから腰の後にあるホルスターに仕舞い、パチンと留め金を掛けた。

「ミッションコンプリート、的なの？おい、終わったぞ。聖香^{せいかが}」
「あら、早かったわね」

何時の間にか、目の前に忽然と姿を現したのは、先の少女、影崎聖香^{かげさきせい}。

「俺を舐めてんのかよ。あの程度でてこずる奴は、ド四流以下だ」
「ふふ、じゃあ、貴方は一流かしら？」

言葉と共に後に気配と殺意が生まれる。

だが、それはダミーだ。本物は

上だ。

確信を持って、足元に落ちていた、先のスーツ達の拳銃のグリップを爪先で引つ掛けるようにして左手の手元に跳ね上げる。
上方に、乱射。大通に大きな火薬の弾ける音が鳴り響く。
影は、それを予測したかのように高速で移動。向ったのは、

「そつちだあ！」

右方、ビルとビルの間にあるこここの更に奥にある路地だ。そちらに残りの銃弾を全て叩き込む。金属とぶつかり合う音が響く。同時にマルズフラッシュで僅かに影が見える。気配が移動するのを止めた。

が、強い殺気を放っているのは変わらない。

雪人は、拳銃をそちらに投げ、素早く腰のホルスターからダガーナイフをドロウ。そして、突貫。空いた左手で、四本目の投擲用ナイフを投げつける。相変わらずの硬質な金属音。怯まずに、雪人は、影の懐に飛び込み、ダガーナイフを横薙ぎに振るった。

通る道は、喉。このまま行けば即死コースだ。

だが、何か金属の様な物で受け止められる。顔は、まだ見えない。相手は、月の光の届かない影を選んで移動している。それすなわち、顔を晒したくないのだろう。速度のせいもあり、雪人の目をもってしても捉えられない。

(こいつらの仲間か?)

疑問が脳裏に浮んだが、それは隅に置き、相手の得物に目を向ける。

(刀か!)

東洋、日本の古代の戦士、侍達が使用した斬撃武器。
西洋の剣が、叩き切るなら、刀は、切り裂く。

(間合いを離されたら厄介だな)

こちらの得物は、ナイフ。距離を詰めるために、投擲用のナイフはあるが、所詮囷。それに、相手は銃弾すら弾く猛者だ。さっきの投擲もすんなり弾かれたとおり。通用はしないだろう。

だから、雪人は、無理矢理、鏑迫り合いに持ち込んで、膝蹴りを叩

き込もうとした。

相手も予測していたのだろう。影は、後方にバックステップ。膝蹴りは、空を切る。が、

（そんな事、予測済みだ）

雪人は、膝蹴りの為に、膝を放ったのでは無い。強く、地面を蹴る為だ。

そこに生まれるのは、加速。圧倒的な速度を持って、雪人は、影との距離を詰める。

月の光を反射して、銀弧と、金のラインが空を走る。

「?!?!?!」

影が驚いているのが、気配として雪人には伝わってきた。だが、それは考慮すべきものではない。今の彼の頭の中を支配しているのは、影を、気配の持ち主をどう殺すか。それだけだ。

光は残像を残しながら、雪人に従う。

それは位置を示しているのに等しいのだが、それすら、考慮に入れる必要の無い速度を雪人は体現している。

瞳の移す世界がさらに鮮明になる。獣の様な本能が顔を覗かせる。

牙を剥き、銀色の爪と共に雪人は、駆けた。

瞳が最大限、開かれる。

それは既に猫科の猛獣のそれ。

金に光る瞳の中で、相手の姿を彼は捉えた。

（女？）

再びの疑問。だが、獣性と体は、動くのを止めない。

頭の中を一つの言葉が支配する。

腹を蹴られ、吹き飛ばす少女の口から空気が溢れ、後ろのビルの壁に衝突。一瞬の呼吸困難と神経を蝕んでいく激痛に、少女は、呻き声を上げた。

「チエツクメイト」

雪人は、小さくそう呟き、ダガーナイフを少女の首元に突き付け、左手で首を押さえ、拘束した。

さて、殺すか。

即座に決断。というよりも、対峙した時から、それは心の中で決めていた。

けれど、

「なんだ、この既視感は？」

思わず疑問が口から零れ出た。

その時、二人の顔が月の明かりに照らされる。恐らく、雲が月にかかってできた影だったのだろう。

露になった顔を見て、雪人の呼吸が止まった。

それは、どこかで見た事のある顔、そんな次元ではなかった。

「お兄ちゃん？」

影の正体、襲撃者の少女の放った怪訝な言葉と同時に、一つの記憶が脳裏に再生された。

そこは、和室。中央には、布団の中に横たわる、小さな少女の姿。

彼女は、目を開いて、こちらを見ている。彼女は、片目の大きな猫目をこちらに向けている。向けられている本人が何かを言うと、彼女はクスリと、笑みを零した。それにつられ、自分も唇を笑みの形にした。

暗転。一瞬の光と共に、闇の中へ。

「あの子はもう長くない。覚悟をしておけ」

一息置いて、

「あの子を殺す覚悟を」

暗闇の中。誰かの声が響いた。

即座に、暗転。

空に大きな月が浮んでいる夜だった。

月光が、縁側に並んで座る二人を青白く照らしている。

「お兄様」

「なんだ？***」

「私は、永くないのでしょうか？」

「……………」

沈黙。それを肯定と捉えた少女は、儂げな笑みを浮かべた。

「分かってたんです。自分の期限くらい。自分の終わる頃合いくらい。でも、案外、諦めなんてつかないものですね。色々、したかったな。外に出てみたかったな。もっと、笑いたかったな。お兄様の

笑顔、もつと見たかったな」

彼女の泣き出しそうになりながらも浮かべる笑みに、こちらが泣きそうになってきた。

「***」

「いいんです。お兄様。お兄様のせいでも、お母様のせいでも、お父様のせいでも、ないんです。誰のせいでもないんです。只、何のせいかといえば」

少女、自分をお兄様と呼ぶ少女は、遠くの月を見つめ、

「運命、ですね」

耐えられなかった。

少女の細い体を抱き締めた。こんな優しい少女が消えていいはずが無い。だから、不条理を呪った。全力で、運命という不条理を呪った。

「お兄様は、優しいですね」

「優しくなんか無い……俺は、お前の受け継いだ才能を疎んだ、羨んだ。時には、憎しみすら、殺意すら覚えた」

「人は、そんなものです。無い物を求めるのが人間だから、仕方が無い。それでも、お兄様は」

彼には、見えない場所。彼女は顎を彼の肩に乗せ、微笑んだ。

「優しいです」

何も出来ない自分の不甲斐無さに、涙が零れてきた。嗚咽を堪え、

齒を食い縛る。

「お兄様は、泣き虫ですね」

腕の拘束が涙と共に緩んだ。優しい笑みを浮かべる少女は、彼の顔に鼻が触れ合いそうな距離まで近づけ、人指し指で、頬を伝う涙を拭い、口に運んだ。

「しょっぱい。死ぬと、この味も感じられなくなるのでしょうか？」

少女の疑問に答えられない。

「お兄様にお願ひがあります」

少女は、彼の腕をスルリと抜けて、庭に裸足で立つ。その姿を月光が照らす。

幻想的な風景だった。少女の容姿は、絶世の美女ですら霞んで見えってしまうほどだ。白く長い髪、片目の、自分とは、逆にある金色の猫目。細く、小さな体。月光に照らされ、儚さが増していた。

「……………なんだ？」

「私を」

一息大きく吸い、少女は、彼に告げる。

「私を殺してください」

嗚呼、聞いてしまった。言われてしまった。願われてしまった。

悲しみなどではない。彼の中に、溢れてきたのは、殺人衝動。

彼を長年苦しめてきた殺人衝動。

それは、一つの単語を叫ぶ。

(殺せ)

「お兄様」

少女は、彼を呼ぶ。彼に望みを託して、彼を呼ぶ。

そして、彼は、腰の後のホルスターから、ダガーナイフを一振り取り出した。

「お兄様」

少女は、彼の手の中にある刃を一瞥して、泣き顔で、けれども、嬉しそうに。

「今まで、ありがとうございました」

そして、少女の命は絶たれた。

胸から血の溢れる少女の死体を彼は、冷たくなるまで、血が暖かさを失うまで、誰かが、来るまで抱き締め続けた。

変わった事が三つあった。

一つは、少女 自らの妹は、この世から消えてしまったという事。

一つは、殺人衝動が、収まったこと。誰を殺しても収まらなかった
激情が。

最後の一つは、自分の普通の目だった片目が、少女と同じ、猫目になっ
ていたこと。

それに気付き、絶叫。

喉が枯れるまで、喉から血液が迸るまで、絶叫した。

記憶の再生が終わった。

再び、目の前の少女に目を向けた。記憶の再生時間は一秒にも満たなかっただろう。けれど、濃密な時間をかけて再生されたような感覚を憶えた。現実時間に変換すると、それは、あまりにも短かった。

だが、少女が、そこから逃げ出すには十分な隙と時間だった。少女は、雪人の左手、喉を押さえている腕の肘を蹴り上げた。そして、緩んだ拘束から抜け出し、路地の奥、闇の濃い方へと駆け出した。

少女が遠のき闇に吞まれて行く。
雪人は、それを呆然と見つめるしか出来ない。

「……………なんでだ？」

ようやく零れた言葉は、それだった。
何時の間にか、殺人衝動は消えていた。

「なんでだ？」

立ち尽くし、ナイフを握ったまま、同じ言葉を繰り返す。

どうしてだ？

頭の中でも繰り返される。

容姿。

全てが　少女のそれと、瓜二つだった。
違う点は、猫目では無いこと。

だが、変わっていない。
何も。

あの少女は、自分が殺したはずの妹の容姿とそっくりだった。
そして、あの言葉。少女は、自分の事を、

『兄さん？』

と、呼んだ。

呼称は変わっていた。だが、その声は……………。

「なんでだ？」

空虚な問いは、暗闇に吸い込まれた。

〜1〜 (後書き)

第一章開始です。感想よろしくお願いします。

〜〜 (前書き)

少し長くなってしまいました(^-^)(?)(?)

日本首都圏内に存在する地方都市、霧ヶ崎市。

そこは、日本でも有数の月が綺麗に見えるとして有名な都市だったが、それ以外は、特筆すべき所の無い、一般的な都市でもある。

雪人と聖香は、とある高層マンションの一室にいた。

地上三十階。そのマンションの最上階にあるこのマンションの中でも最も高級な部屋だ。ワンフロア全てを使っている為、かなりの広さがある。内装や、家具は、モデルルームの時の物を買取り、そのまま使用されている。それでも、絢爛豪華な事は変わらない。床は、大理石。壁は、白。家具も全て、イギリス王家の使用している物と同じ家具。どれも、椅子一つでも、数十万は下らない。高い物になると、金額不明の代物すら出てくる。

その部屋の持ち主であり、社員の雇用主は、ソファに座り、高圧的な視線を正座を強いられている社員に向けていた。

勿論、前者が聖香。後者が雪人である。

「で、どうして逃がしたのかしら？ド五流さん」

「ごめん……」

「それ、答えになってないわよね？ちゃんと質問には、応答しなさい」

広いリビングにカツカツとハイヒールが大理石を叩く音が響く。

「ごめん……」

「貴方、子供じゃないんだから。うんやごめんなさい以外の返答方
法考えなさいよ」

呆れた様な聖香の言葉に、雪人は、小さく苦笑を浮かべた。

「まあ、いいわ。イレギュラーな因子だったから捕まえて拷問にでもかけてやるうと思っただけよ」

「その思考回路が過激だよな、お前」

「お前じゃなくて、今は、仕事中のだから影崎社長と呼びなさい」

「じゃあ、影崎社長は基本思考回路が過激だよな。アレか、アレなのか？サディストなのか？」

「そうだけど？」

「……認めやがったよ、こいつ」

雪人のジト目を諸共せず、聖香は、「兎に角」と、会話を切り出した。

「今日のアレを見かけたら、引き摺ってでも、死体にしてでも連れて来なさい。拷問か何かして、情報を引き出すから」

「……死体は、無意味だろ」

「降霊術をするわ」

「マジか?! 出来んのか?!」

「ええ、この本に書いてある通りにやれば」

と、言つて、聖香が差し出ししてきた。と言うより、運んできたのは、分厚い、広辞苑よりも分厚い。全体的に真っ黒なそれからは、どこか漫画などに出てくる、例のアレに似た雰囲気を感じていた。

「魔道書どおりにやれば」

「なんでそんなものがッ?!」

表紙を見ると、何か、どこの国のものかも分からない(象形文字に近い)金文字がゴシック体で踊っている。

「ちなみにこの魔道書の名前は？」

「ネクロノミコン」

「死者の書かよ！ゾンビ出るじゃねえか！やめろ、今すぐ破棄しろ！それ！」

なんて物もつてやがんだこの女……。バイオハザード起こるじゃねえか。降霊術どころじゃねえよ。

雪人の戦慄しているのを他所に、「むう……。仕方ないわねえ」と、聖香は、未練たらたら視線をネクロノミコンに向けて、それを少し離れたテーブルの上に、「よいしょっと」と、おばあちゃんのような掛け声と共に若干よろけながら運んでいった。帰ってきた聖香は、ソファに座り直して、

「まあ、冗談は、さて置き」

「冗談か……。？ほんとに」

この女ならやりかねないし、持っていそうだ。

「冗談よ。兎に角、見つけたら速攻で鹵獲しなさい」

「……了解」

一瞬の沈黙を置いて、雪人は、了承の言葉を口にした。

正直な所、鹵獲するという方針は賛成だ。自分も、あの少女の正体が知りたい。

だが、一番の不安要素は

（聖香、だよな）

そう、この雇い主たる、闇色の少女こそが、雪人の不安要素の最上

位に立っていた。この少女は、一筋縄どころか、恐らく、自分程度では、彼女の精神の末端のその末端すら揺らがす事は出来ないだろう。

その為、下手に自分の情報を漏らすのは、愚の骨頂だろう。

(……黙っておくか)

雪人は、そう心の内で決めた。すると、

「では、貴方が、未確認因子を逃がした理由を教えてもらおうかしら?」

早速来たな!おい!

雪人は、叫び出しそうになるのを堪えて、

「……こう、言いたくはないが……相手が予想以上に手練だった。それだけだ」

嘘をついた。聖香には、すまないが、ここは嘘について、それを貫くしかない。

結果は、

「嘘ね」

一秒も掛からず看破された。

「どうしてそんな嘘を俺がつく?」

「言うて欲しいの?」

試す様な聖香の視線から、雪人は、目を逸らし、

「……いや、いい」

そう言うと、雪人は立ち上がり、玄関の方に歩いていった。

「明日、学校よ、憶えときなさいね。そういう契約でもあるのだから」

「分かってる、俺は、契約は守る」

そう言い残して、雪人は、去っていった。

雪人が立ち去るのを見守って、聖香は、ソファから立ち上がって、テーブルに近寄り、魔道書だと言ったそのの間から一枚の写真を取り出した。

「兄妹、か」

聖香の見つめるその写真には、一組の男女。一人は、片目が金色の猫目の幼い少年。もう一人は、少年よりも、さらに幼い、少年とは逆の目が猫目の優しそうな微笑を浮かべた少女。二人の共通点は、白髪、そして、良く似た顔立ち。そして、鏡合わせの様に逆になっている猫目。

「私には、無縁、ね」

小さな苦笑を浮かべ、写真をテーブルの下のゴミ箱に捨てた。

*

「レディースアード、ジェントルメン！！」

無駄に陽気な男の声が暗い部屋に響き渡った。

そこには、複数の影。そして、広い部屋だった。その部屋の中の真

ん中にあるテーブルの上の小さな電球がその部屋を照らす唯一の明かりだった。

だが、一つの白い光が闇を切り裂いた。

スポットライトだ。

それは、床より少し高い位置にある壇上を照らした。そこには、マイクと、それを置くスタンド。そして、一人の長身の男。黒髪を背中に流すほど長く伸ばし、ダークスーツを身に纏っている。顔には、フレームレスの眼鏡。その奥にある目は、味わいすぎた快樂に歪んでいた。快樂のみを求める享樂者特有の目だ。

「さてさて、今日のショーにお集まりいただいたのは　って、え？　ショーじゃない？　それ先に言っただけよー。三人殺しちゃったじゃないか」

もー。と、ふざけたように頬を膨らませる彼の立つ壇上の下には、男の骸が三つ。どれも鳩尾に何かで貫かれたような傷がある。

「まあ、仕方がないか。僕に殺させる程度じゃあ、駄目でしょ？　え、お前と比べるな？　そんなもー」

ニコニコと笑い、一息置いて、

「もつともー」

と、マイクがキーンとハウリング音をたてる程の大声で叫んだ。

「嬉しい事言ってくれるじゃないですか！　褒めたって何もでませんよお？」

さっきから誰と話しているのかも不明なテンションの無駄に高い男は、クネクネと気持ち悪く体をクネらした。

「あのさー、兄さん。さつさと話し進めないと蜂の巣になっちゃうよ?。」

すると、闇の中から、一人の少女が壇上の近くに歩いて来た。金髪をツインテールにして、瞳は青。服装は、黒い白衣を羽織り、その下に、胸に羽ペンと剣の交錯した紋章の刺繍が金糸で入れられたセーラー服を着ている。

「むむ、そんな物騒なのはどこの誰だい?。」

「私」

ツインテールの少女は、一言そう答え、黒い白衣を払い、その下の脇辺りに下げていた専用のホルスターから漆黒の軽機関銃を両手でドロウ。そして、兄と呼んだ男に向けて、即座に照準。安全装置を親指で跳ね上げて外し、両手で抱えるようにして発砲した。

マルズフラッシュが暗闇を僅かに照らし、無数の発砲音が響く。空になった薬莢が遊底から排出され、床に金属音を伴って転がっていく。

暫く、少女は引き金を引き続けた。引き金に手ごたえが無くなり、弾丸が吐き出されなくなったのに、舌打ちをして、軽機関銃を床に投げ捨てた。軽機関銃は、床を滑り、壁に当たった。

「これでも死なないか……。重い我慢したのに」

不満げに呟く少女の視線の先には、灰色の帳。

その向こうから、

「ごほごほ。全く酷いなあ。兄に向って、そんな物を向けるなんて。その上、撃つなんて。酷いよ全く」

先ほどの眼鏡の男が咳と共に現れた。右手には、一メートル弱の豪華な金の装飾がされた両刃剣が握られている。どこから取り出したのかは、謎だ。

「これはどうだっ」

と、少女が素早く腰のホルスターからドロウしたのは、大口径自動拳銃。

両手で、拳銃を支えるように構え、発砲。

今度は、二、三発放つ。牽制の意味もあるのだろうが。胸と額を狙っている弾丸には、牽制の為以上に殺意が無駄にこもっている。

だが、全ての弾丸が男の僅かな動きと、剣の先だけを振る動作で無力化される。

「ふふ、甘い甘い」

「キイイイイイイッツツ！殺す殺す！絶対殺す！兄さんが貞操失う前に殺す！」

「それは酷いよ、ステラ！男にとって貞操って、結構重要なんだよ?!」

「女のヴァージンと比べたら消しカス以下よ！」

言い切るステラに、男は、激しく動揺。

「そ、そんな！お兄ちゃんの貞操は、一体どうなっちゃうの?!」

「牛にでも捧げて来い！」

「ああー！誰かHELP！HELPME！」

半狂乱で叫ぶ男にステラは、顔を横に向け、視線を僅かに逸らし、小さく囁いた。

「……………それが嫌なら、私が貰ったっていいわよ。 兄さん」
「……………ステラ」

小さな囁きを逃さず聞いた男は、頬を染める妹に微笑みかけた。すると、さらに少女の頬は、赤くなっていく。

「……………さつさと会を進めろよ。このブラコン兄弟（、、）」

ぼそりと不満を漏らしたのは、最前列を陣取る、ステラに兄さんと呼ばれる男の攻撃で屍となった男達の中央の椅子に座るニット帽をかぶった茶髪の少年だった。彼は、そこ等辺の若者とほとんど変わらない格好に、何故か、右耳に大きなサファイアのついた女物のイヤリングをしていた。

「……………それも、そうね。兄さん、続きは後にしましょ」

「そう、だね。ステラ……………」

二人は、濃密な視線を絡ませ、同時にお互いの唇にその視線を向けた。けれど、お互いに情事には、発展はしなかった。ステラは、やや未練がましそうな視線を兄に向けながら、壇上から降り、その段差に腰を下ろした。

「さてと……………。今回も始める？」

「始める」

命令口調のニット帽の少年に肩を竦めて見せて、男は、言葉を紡ぐ。

「定例裏市議会、開幕させて頂きます」

男の大きなお辞儀を合図に、会議は、始まった。

「さてさて、司会を勤めさせていただくのは、毎度お馴染み、ディラン。マックデールでございます」

「きょうの議題は……特に無いので」

「あるぞ。勝手に省くな、ディラン」

ニット帽の少年の睨みに、ディランは、「おお、恐っ」と、わざとらしく体を振るわせた。

「あるそうなので、どうぞ！市長」

「お前が司会だろうが……」

暗がりの中の誰かが、そう呟いて、嘆息した。

「文句言わない！」

ディランは、叫び、壇上から嘆息の聞こえた方に大きく跳躍した。だが、ディランがそこに辿り着く前に、空中で金属音が弾けた。

「おろっ？」

再びディランが現れたのは、壇上の下。丁度、テスラの目の前だ。

「ぎゃひっ！」

そして、ディランは、眼鏡の奥にある目を剥き、奇妙な笑いを上げた。同時に、両手で持った剣を斜め上正面で構えた。

と、同時に、一人の少年が姿を現した。黒ずくめで、頭には、黒のバンダナを巻いている。その少年の手とディランの剣の間には、彼

が逆手で構えた、鈍い鉄色の奇妙な形状をした刃物らしきなにか。

「クナイ！と言う事は、忍者か！伊賀か？甲賀か？木の葉か？答えろよっ！」

叫び、というよりは、狂笑。それを上げながら、剣が軋むほどの力を腕に込めた。

すると、
ピシリッ。

そんな小さな音がクナイと剣の交差点から鳴った。

忍者は、目を見張り、剣を受け止めているクナイを見つめた。そこには、小さな亀裂。その亀裂は、現在進行形で領域を広げていく。それから一秒もしない内に、クナイは、砕けた。

デイランの剣は、クナイを砕いた勢いのまま、忍者の左胸に右下斜め袈裟切りを放つ。

だが、忍者も伊達や酔狂で忍者をやっているのでは無い。

傍観などせず握っていたクナイが砕けた瞬間に、忍者は、バックステップ。

振り切られた剣からは、轟風が撒き散らされ、後ろに居たステラのツインテールを大きく揺らした。

「キャッ！」

ステラの口から可愛らしい悲鳴が聞こえたが、デイランの耳には、その声は、届かない。

デイランは、剣を振り切った体勢で、忍者を追う為に足を踏み出そうとした。

「そこまでだ。デイラン」

ニツト帽の少年　市長の仲裁がそこに入った。

「何ですかあ？僕に文句言ったんだよ？殺されて当然だよ？邪魔した奴もジエノサイドだよ？」

「減給」

「分かりました。我主君。貴方様の命令に私は、全身全霊をもって従いましょう」

「……………相変わらず、金が絡むと意思が弱いな、お前は」

「当たり前ですよ。金は、あつて困る物じゃない。いくら合っても足りない物の一つだからね」

「まあ、賛同しないことは無い。」

さて、再開と行こうか」

市長は、デイランとの会話を打ち切り、壇上の上上がった。デイランは、大人しく、ステラの横に腰を下ろし、近くに剣を突き立てた。

その二人の距離が異常なまでに近いのは、この際、置いておこう。

「そこ忍者。先ほどは、すまない。うちの護衛が迷惑を掛けた」

市長の言葉に、忍者は、特に反応を示さなかった。その前に、何時の間にか、忍者は気配ごとどこかに消えていた。いや、気配を感じ取れないだけで、この部屋のどこかには居るのだろうが、この暗闇の中では、見つける事は、叶わない。

「じゃあ、議題に移ろうか。」

今回の議題は、一つ。

最近、巷を賑わしている連続殺人鬼、『切ヶ崎リッパー』につ

腹を抱えて爆笑するディランにひたすら冷たい視線が何本も集中する。

「ほら、市長さっさと言お。どうせ、僕このみの依頼になるんでしょ？」

つまり。顔を欲望に歪ませ、ディランは言葉を紡ぐ。

「賞金を掛けるんでしょ？」切ヶ崎リツパ」に

市長は、はあ、と息を吐いて、

「と、この屑の言った通りだ。賞金を『切ヶ崎リツパ』に掛ける」

「……金額は？」

先ほどの忍者が僅かに闇から顔を覗かし、尋ねた。

「で、どうだ？」

空気が凍りついた。

市長の提示した金額は、この場に集まる雇われの護衛や、あまり権力の無い権力者（？）の思考を止めるに十分な金額だった。

「ひやはっ、……………市長マジか？」

奇妙な笑いを上げて、真剣な顔で訊ねてきたディランに市長は、唇の片端を上げて、笑って見せ、ゆっくり、頷いた。

「市長。ステラを置いていく、護衛はそれで十分だからね。僕は、殺人鬼探しだ」

デイランは、顔に狂気を満たし、壇上の段差から立ち上がった。

「え、やだよ、兄さんと一緒がいいよ……」

「ごめんな。お前は、市長の護衛を頼む」

「むう……」

唸り、デイランを睨みつけるステラに彼は、苦笑を向け、

「帰ってきたら、してやるから。それじゃ、駄目か？」

「………もう、こんなところで言わないでよ」

頬を染めて、ステラは、口元を緩ませた。

「分かった。怪我とか、しないでね。兄さん」

ステラの言葉に、笑みで肯定して、デイランは闇の中に歩いていった。

数分後。

市長とステラ。そして一部の権力者のみがこの部屋には、残っていた。彼ら、彼女らは、この市の真の支配者と呼べる者達だった。

同時に、日本の闇の深淵に存在する組織のメンバー達でもあった。

「そう言えば、市長」

「なんだ？」

「貴方の雇っている者について質問がある」

「ああ、デイランについてか？まあ、あのふざけた態度には、よく咎めたくなるが」

「違う。あの派遣会社についてだ」

「………あの会社がどうしたと？」

僅かな沈黙を置いて、市長が静かに尋ねると、

「何故、影崎の人間が生きている？」

「（影崎ッ?!）」

ステラは、その名を聞き、瞳を見開き、戦慄する。

それに気付いているのか、気付いていないのか、気付いていないふりをしているのか、特に誰も反応を示さない。

「さあ、な」

一人の少年と一人の少女の顔を思い浮かべながら、市長は、呟く。

「どうしてだろうな。」

確かに全員、殺させたはずなのに」

市長は、何かを思い出すかのように、天井を仰ぎ見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1952z/>

カゲツキ ~ 影月 ~

2011年12月8日01時02分発行